
僕は空を飛ぶ

swan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は空を飛ぶ

【Nコード】

N6649S

【作者名】

Swan

【あらすじ】

両親とは一緒に暮らせず、従姉であるオリビアと一緒に暮らすラビエルド。子供ながらに頑張っていてもどうしても寂しくなる事はある。母に会いに行く事をひそかに決意した。

ついてこないですよ(前書き)

読者の皆さま。

このお話はシリーズの前作「弱虫のてのひら」のネタばれを含みます。ご注意ください。

この話だけでも読めます。

ついてこないでよ

僕の日課は、朝から僕の部屋で眠る奴を叩き起こす事から始まる。

「いい加減に起きてよっ！僕だって忙しいんだからね！」

居候の男、シンは寝返りを打ちながら擦れる様な声で答える。

「うーん、今起きるからあゝ」

寝起きの悪さは始末に終えない。毎日ウンザリするんだもの。

僕の名前はラビエルド・クレイ。今年の初めから村の学校に通う五歳。

皆、僕の事をとてもしつかりしていると言う。

けれど僕自身は、本当は凄く甘ったれで意地っ張りだと思う。そうシンに言った事があるが、彼は笑ってそう思えること自体がしつかりしている事なのだ、と言った。

部屋から出て階段を下りると、朝食の準備をしていたオリビアが振り返った。

彼女は従姉で事実上僕を育てている親のような人。

「おはよう。シンはまた寝てるの？」

頷くと、呆れたようにため息を吐いてオリビアは椅子に座る。

「食べちゃおう。すぐ起きて来るわよね。」

「さあ？シンってばいつも僕に起こされるんだもん」

拗ねたように呟くと、オリビアが笑う。

「まあ、シンも近頃忙しいみたいだし許してあげて。」

ついふた月前に王都からやってきた彼は、本来隣国への旅の途中で行き倒れて、オリビアに拾われたのだ。

彼は出て行くつもりだったらしいが、オリビアに引き止められて居ついてしまった。

「今日は学校休みだけど、どうするの？」

オリビアが、首をかしげながら尋ねる。

「オリーが手伝って欲しいなら、館のほうに行くよ」

「大丈夫、今日はシンに手伝ってもらうから。遊んで来ていいわよ」

「・・・」

シンが来てから僕の仕事はあまり無くなってしまった。

まだ小さい自分にできる事は少ないのだけれど、少し寂しい。

シンは、村を治める為に働くオリビアの手伝いを実に良くこなす。

「どづかした？」

沈黙を破り現れたのは、寝起きのシン。

乱れた髪の毛が凄くだらしない。

それに階段を下りてくる彼は…

ガツン！ガタガタガタツ！ゴン！

凄く凄くすつごく、ドジなんだ。

見事に階段の途中から転げ落ちたシンは、むくりと起き上がると、あくびをしながら椅子に座る。

「またタンコブ増えたよ」

暢気にそう告げる彼が実のところあんまり信用できない。

体中にどこかにぶつけた痣が沢山あるのを知っている。一緒にいると自分まで怪我しちやいそう。

「オリー、僕は今日外に遊びに行くよ。」

スープを口の中に流し込んで、立ち上る。

「そう。あんまり遅くまで遊んじゃダメだからね。」

オリーブは、いつも口にする言葉を言っていると頷いた。

テーブルから離れると、二階の自分の部屋に駆け込む。

オリーブはいつもの通りに、いつもの言葉を言っただけなのに、とっても素っ気無く感じる。

オリーブの隣に居るのが、僕じゃなくてシンに変わってしまったからなのかな。

壁一面を埋る今はいないオリーブの兄キフィが残した沢山の本を前に僕は立ち尽くす。

「キフィ…」

キフィの代わりに自分がオリビアを助けてあげようと、沢山の勉強をして来たけれど、もう必要が無いのかな。

目の前に並ぶ本棚から、まだ読んだ事のない本を一冊と、大事に何度も読んでいる本を手にとって、机の上においてある鞆に詰め込む。

そうだ。

久しぶりにお母さんに、会いに行こう。

こんな弱虫な僕を、抱きしめてくれるかな。

台所から、オリビアが焼いたビスケットとジャム、それからミルクを持ち出して家の外に出た。

村で一番大きなお屋敷に住んでいるのに、オリビアは僕の知る限りではお屋敷のほうには住んでいない。

裏庭にある使用人の家の隣にある小さな家に僕たちは住んでいる。前に尋ねたら、あまりにも広すぎてみんな迷子になっちゃうから、と冗談めいた事をオリビアは言った。

広場の噴水の前には、いつも遊ぶ友達が集まっていた。

ボールで遊んでいた輪の中から、仲良しのココが出てきた。

「ラビ！一緒に遊ぼうよ！」

「僕、今日は遊ばないよ」

そう答えると、二つ上のはずのココがいじけて、口を尖らせる。

「どうして？ 今日畑も学校もお仕事も無いじゃないの」

「うん。僕、お母さんに会いに行くんだ」

不思議そうな顔をしてココが口を開く。

「でもラビのお母さんは…、私も一緒に行つていい？」

「ダメだよ。僕、一人で会いに行くんだよ」

首を振ると、ココは肩を落として頷いた。

「気をつけてね」

手を振りながら別れる。

広場から対角線上に綺麗に伸びる通りを北西に進む。

そちらには、村の畑が広がっている。

沢山の野菜が育てられていて、いつもオリーブに皆が分けてくれたりする。もちろん、僕たちも野菜を育てているんだけど。

僕には能力者としての能力がある。

決してこのプレセハイドの村では珍しい訳じゃないけど。

けれど、僕やオリーブは能力者一族の直系だから、とても力が凄
いんだ。ふふ、自分で言っちゃった。

何の能力かと言うと、それ自体は多くの人を持っているアマゴイ
なんだ。

でもね、雨を降らせるのに普通は三人とか人が必要なんだけど、
僕は一人でできるんだ。この前、村の長老に褒められたんだよ。

考え事をしながら歩いていくと、村を取り囲む高い塀が見えてきた。

それは本当に高い高い塀で、昔、悪い人から村を守るとために造られたと聞いた。

この高い塀を僕は、もちろん越えることができない。

ここには無論、扉が隠れているわけじゃなかった。村の出入り口は、西側に正門が一つ、南側に隠し扉が一つだけ。その両方からは僕が行きたいところへは遠回りなんだ。

だけどね、僕なら出られる所があるの。

壁沿いにある木の陰を歩いていくと、木の根元に大きな板が置いてある。それは、塀の下を潜り抜ける小さな穴だった。

僕は、板をずらして穴に身体を捻じ込む。

中は、たいして広くないし、落ち葉なんかが沢山入り込んでいたけれど、僕はいつも村から出るときはここを使う。

この道を教えてくれたのは、隣に住む使用人家の息子スターチだった。

彼は冗談半分だったし、本当に僕が使っているなんてきくと知らないだろうな。

身体を滑り込ませていると、急に頭の上に影が出来る。慌てて顔を上げると、

「危ないよ」

にっこり笑うシンが居た。

「大丈夫。いつも使ってるから」

「そうみたいだね」

大していけないことではないようにシンは頷くと、淵にしゃがむ。

「ついてこないでよ」

上目遣いにシンを睨んだ。

「そうだね。僕はその抜け道を抜けることが出来ないなあ」

「じゃあね」

シンに手を伸ばされる前に僕は体を森に全て押し出した。

僕、死んじやう！

森は静かで薄暗かった。

この森はいつも何かを秘めている。

そう、いつだったかお父さんが言っていた。

山に続く森を抜けるための道がこの村には存在しない事になっている。

けれど、本当は一つだけある。

母さんの所へ行くためにお父さんがこっそり印を残してくれていたのだ。

少し大きめの杉の根元に僕と父さんしか分からない傷がつけてある。

等間隔に続くその木をたどりながら歩く。

息が上がる。

一時間ほど僕は歩き続けた。

下ばかり見ていた僕の足元に光が射す。

ほのかなぬくもりが首の辺りを撫でていく。

「お母さん…！」

顔を上げる。

乱立していた木々の隙間が広がり緑色の絨毯が広がる。

僕はいつの間にか走り出していた。

「お母さん！ お母さん！」

何十キロも続く森の真ん中に突如として草原が現れている。
そこが僕の目指していた場所。

段丘のあるそこを叫びながら走り回る。

丘の一番高い所まできて、

「お母さん、出てきてもいいんだよ！ 僕しかいないんだから！
お母さん！ 僕しか…いないんだから！」

悲鳴に近い声で叫び、息が切れて足がすべり膝を着く。

「…僕だけなんだよ？」

涙が浮かびダダをこねるように地面を両手で叩き転がる。

何度来ても、お母さんはどんなに呼んでも現れてくれない。

一人で来れば自分だけにでも姿を見せてくれる気がいつもしていた。
ラビエルド、と名前を読んで抱きしめてくれる。

それは、いつも村の子供達がしてもらったように。

たったそれだけの事なのに僕はしてもらった事がない。

「お父さんもお母さんも僕の事が嫌いなのかなあ」

泥と草の混じる涙を汚れた掌で擦る。くしゃくしゃの顔と髪のまま起き上がる。

「もっと、いい子じゃなきゃ…会ってくれないの？」

立ち上がると、下のほうに広がる森へと続く草原と、白い沢山の花が見える。

僕は下へ行くためなだらかな所に足を向けた。

けれど、それは上手くいかなかった。

本などが沢山入ったバツクが大きく揺れて僕の背中を押す。

ぐらり、と体が傾いて気付いた時には僕は大きく空に向かって飛び出していた。

体がどこかにぶつかるのが怖くてぎゅっと目を瞑る。

「僕、死んじゃう！」

けれど、そんな痛いことは起きなかった。

僕の体は何か柔らかい物に包まれている。薄っすらと体温も伝わってくる。恐るおそると瞼を開く。

「大丈夫？」

知らない女の人が僕の体を抱きとめてくれていた。

けれど、僕はビククリして返事が出来なかった。

そこは、見たことも無いところだった。辺りがすべてとってもお天氣のいい日の空みただった。地面が無かった。浮かんでる。

「僕、大丈夫？」

もう一度女の人が尋ねる。

「うん。僕死んじやったの？」

思わず、訊ねてしまった。

いつか本で読んだ、死んだ人が行く世界に似ていたから。

「どうして死ぬの？」

女の方はクスリと笑い訊ねた。

「だって僕、高い所から落ちたよ」

「そおう？ 怪我してないわよ」

ふわりと体を外して女の方は僕の両手を握る。そうすると体が浮いて自分の体が見れた。

「本当だ。じゃあ、ここはどこ？」

「うーん。私には分からないわー。でも、私も誰かに呼ばれてきたのよ」

にっこり笑うと彼女はウインクをした。

金色の髪がふわふわと舞っていてとてもお茶目な感じがする。

「お名前は？」

「僕、ラビエルドっていうの」

「まあ。ラビエルド…」

彼女は驚いて僕の顔をまじまじと見つめた。

そして一層笑みを広げる。

「いい名前ね。私の息子も確かラビって言うのよ。まだ、小さいんだけどね、かわいいのよ」

「なんでつれてきてないの？」

僕は思わず訊ねる。

小さいのにお母さんといられないなんて。

「…一緒にいたかったけど、残念ながら連れて行ったらダメ！ってダーリンに言われちゃってさあ、私は大事に育てたかったんだけどね」

その言葉はショックを受けた。その子が可哀想だ。

この人は子供を置いて来たんだ！

「酷いよ！ その子はお母さんといたかったのに！ お母さん居ないと寂しいのに！ どうして置いて来たの！」

彼女の手を払いのけて僕は叫んだ。

「…ダメなの。連れて行ったら、ダーリンも周りの人も悲しいわ。私が居なくなるだけじゃなくてあの子まで連れて行ったら…」

彼女は凄く悲しそうな顔で微笑んだ。

「居てあげればいいの！ 寂しいの！」

「それは出来ないの。ごめんね。でも、大事に育ててもらえたらいい子になるわ。優しい子になるわ。」

凄く悲しくて僕はまた泣き出していた。

再び彼女の手が伸びてきて僕は彼女の腕の中に包まれる。それは味わった事無い優しさで、僕はしがみつく。

「あなたは私の誇り」

静かな声が降りてくる。

「優しい子ね。優しい人に育ってね、周りの人も大事にしてくれてるわ。一人じゃないのよ、ラビ…一人じゃない。」

彼女がオデコにキスをくれる。

「…お母さんなの？」

「ええ。そしてみたい」

につこり笑っていたずらが成功したみたいに笑う。

「どうして、いつも来てくれないの？」

「今、あなたに会えたことの方が奇跡なのよ。でも、これだけは言っておくわ。いつでも見てるからね、いつでも愛してるからね」

キラキラした笑顔がふつと変わった。

「まあ、いけない。もう私行かなきゃいけないわ」

「どうして」

おどけた様子で腰に手を当てると、お母さんはおちゃめな威厳たっぷりに言った。

「神様がもう時間よ！　って急かしてるの」

「やだ僕も行く！」

縋り付くと、そっと離される。

「だめよ。あなたはまだ来ちゃダメ。ダーリンがカンカンで私を怒るわ。だから、いつかその時が来たら迎えに来るわ」

「でも…僕、寂しいよ。弱虫だもん」

「あら、ダーリンと私の子供なんだもの絶対かっこよくなれるわよー。保証つきー！」

ウィンクをするとお母さんはぎゅーっと僕の体を抱きしめて僕の顔はお母さんでいっぱいになる。

「会えてよかった。周りの人を支えてあげられる人になるのよ。愛

してるわ、ラビエルド」

眩しい光が急にやってきてラビは瞼を開けた。

先ほどまでいた水色の世界は高い高い所にあり自分は緑の上
にいた。

「？」

「大丈夫？」

上から降ってきた声に顔を向ける。

「どうして？」

「ああ、ラビを追いかけて森を歩いてきたらちよつど君が丘から
転げ降りる所でさ、間一髪」

僕は顔をしかめた。

だってシンの顔は泥だらけで沢山傷が出来ていたから。

「違うでしょ」

僕が手を伸ばすとシンは穏やかに笑う。

「ラビが無事ならいいのです。それより、ラビはここに来たかっ
たの？」

僕は体を起こす。

少しだけ体が痛かったけど、掠り傷のようだった。周りを見る。白い花が一面を埋め尽くしちょうど僕がいるところ中央に白い板が地面に突き刺さっている。なんだか少し曲がっているけど。

「悪いなあ。ここに眠る人に思いつきり突進しちゃって助けてもらったんだ。怒ってないといいけど」

シンがそつと板を元に戻した。

「怒らないよ。笑ってたもん」

「？　そうか、ならよかった。ここはとても綺麗なところだね」

お母さんの為に僕とお父さんがこの花の種を蒔いた。
大好きな花だから、ハニーも喜ぶさ。

少し、顔を赤くして言っていたお父さんの顔を小さかったけど覚えてる。

「シン、助けに来てくれてありがとう」

「どういたしまして」

素直な言葉に眉を上げながらシンは笑った。

「お母さん、僕、こんな弱い人じゃなくてキフィやお父さんみたいなカッコいい人になるね！」

「え？　今のなんだよラビ」

シンが少しいじげる。

「だって、お母さんの保証付だもん」

そういうと、シンが困った顔で天を仰いだ。

「僕って…」

つられて僕も空を見る。

優しくてカッコいい人になろう。

優しいお母さんと、かっこよいお父さんの子供なんだから！

おわり。

僕、死んじゃう！（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございました。

2話完結です。

ラビエルドは家庭の事情ってやつで父とも暮らせていません。
本人も納得はしようとしています。幼い心には少し辛いのだろう
な…というところから書いた話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6649s/>

僕は空を飛ぶ

2011年5月24日22時06分発行